海軍の先駆者 小栗上野介正傳

阿部道山［著］

解説 村上泰賢

限定三百部復刻

その先見で多くの功績を上げながら
維新前夜、惜しくも斬首された
「明治の父」の生涯を描く

マツノ書店

挿絵は本書「見返し」より

小栗上野介　一八六〇年六月二日朝ワシントンのウィラードホテルでの写真から

東郷元帥書（小栗家寄進善門院所蔵）
日露戰爭了りて後元帥は小栗上野介の後裔十三代小栗貞雄氏及び息小栗又一君を自邸に招じ「日本海大海戰は上御一人の御稜威に因る處ではあるが上野介の建設した工廠に依りて日本海軍は思ふ存分其の威力を發揮し得られた」と感謝されこの揮毫を贈られたのである（一〇五頁參照）

小栗上野介の菩提寺・住職による
ミス訂正など三十頁の解説付決定版。

小栗上野介略年表

和暦		西暦	関係事項	世の動き
文政10年	6月	1827	江戸駿河台で生まれる	
				1853　ペリー浦賀来航
				1858　日米修好通商条約調印
安政6年	9月	1859	本丸目付となる	安政の大獄
	11月		豊後守となる	
万延元（安政7）年		1860	遣米使節目付として渡米　ワシントン～ボルチモア～フィラデル	咸臨丸・ポウハタン号出航
	1月～9月		フィア～ニューヨーク～アフリカ～インドネシア～香港～帰国	井伊直弼暗殺
	11月		外国奉行となる	
文久元年	5月	1861	対馬事件で対馬へ	アメリカ南北戦争
文久2年	6月	1862	勘定奉行勝手方になる	生麦事件
			上野介となる	
	閏8月		江戸町奉行・歩兵奉行	
	12月		勘定奉行勝手方を兼任する	
文久3年	7月	1863	陸軍奉行になる	
元治元年	8月	1864	勘定奉行勝手方になる	禁門の変
	12月		軍艦奉行になる	下関戦争
慶応元年	5月	1865	勘定奉行勝手方になる	
	9月		横須賀製鉄所鍬入れ式	
慶応2年	8月	1866	海軍奉行を兼任する	薩長同盟
慶応3年	6月	1867	兵庫商社を建議する	10月 大政奉還
	12月		陸軍奉行を兼任する	12月 薩摩屋敷焼き討ち
明治元（慶応4）年	1月	1868	役職すべて解任される	戊辰戦争
	3月		権田村（高崎市）へ移り、東善寺に仮住まい	
				7月 江戸を東京と改める
	閏4月6日		西軍により斬首される	9月 明治と改元

遣米使節としての上野介

小栗は事實上の一行の總指揮官格であり、又一番眞劍に歐米文化を我國に輸入しようと企てた人である。懷往事談に、

「さてこの批准の使命は誰に任せられしかと見れば、外國奉行新見豐前守、村垣淡路守、御目付小栗上野介（豐後守）にてありき。新見は奥の衆とて將軍の左右に侍したる御小姓の出身、その人物は溫良の長者なれども決して良吏の才に非ず。村垣は純乎たる俗吏にて、聊か經驗を積たる人物なれども素より其器に非ず、獨り小栗上野介は活潑にして機敏の才に富みたりしかば、三人中にて纔に此人ありしのみ、後年に至り小栗が幕末の難局に當りて善く之に堪へたるも、米國に赴きて其見聞を廣めたりしもの冥々裏に其の効果ありしものか云々。」

小栗が後年我が國に一大造船廠を建設したのは實にこの使節から得た收穫であつて、國家に取つても大幸となつた。村垣の日記にある通り小栗は井伊大老より立合ひの意味で派遣されたのである。なるほど、形式上は新見正使、村垣副使となつてゐるが、一行の儀式並に行程あらゆる點に於て小栗がうんと云はなければ行はれなかつたことは事實である。條約文にもこの三人が同列

を以て署名書印してゐる所より見るもわかる。故に或る學者が遣米使節として小栗をも合せて三名の名を附してゐるが、かうした事實に據る論である。

咸臨丸と福澤諭吉

この一行に勝海舟や福澤諭吉の如き明治に貢獻せる人物が加つたについて咸臨丸を語らねば徹底しない。小栗一行の開闢以來の公式使節が米國軍艦「ポーハタン」號に乘艦して行くが、これと並行して豫備として一行護衛としてまた日本海軍の腕だめしと云ふわけで咸臨丸が行くことになつた。これも前代未聞に屬すべき快事だ。もと〳〵我國近代海軍の發祥は幕末に於ける長崎海軍傳習所なりとするがこれは阿部伊勢守の發議命令に依つて長崎目付たる永井玄蕃頭に命じて作つたものである。この傳習所には勝もゐたのであるが、然も海軍は永井がその創設者なりと稱するのは聊か曲論である。寧ろ阿部閣老の先見に依ると云ふべきであらう。勝がさうであるかの如く明治に至り勝自身が海軍史を編してゐる所から來る誤りである。これ亦正鵠でない。正論でないと云ふのは、いくら人物が出來た所で、陸軍とはわけが違ひ軍艦そのものがなければ海軍そのものは零であるからだ。即ち造艦技術が伴はなければ海軍は成立たない。この點、我海軍の人的

威容は幕末海軍長崎傳習所を以てその緒と云へよう。併し海軍の根柢をなす造船廠は小栗の創設した横須賀工廠也と斷じ小栗こそ我國海軍の父也と稱することに異論のあるわけがないはずだ。

ポウハタン号の随行艦として日本とサンフランシスコを往復しただけでワシントンへ行っていない咸臨丸や勝海舟が、なぜ今では遣米使節よりもはるかによく知られているのか、そして「勝海舟が大変努力勉学し、咸臨丸の航海を発案提議し皆を励まして航海を続けた」という史実とはかなり異なる虚実取り混ぜの「いいお話」になって戦後は「歴史教科書」にまで織り込まれたのか、という話も「解説」に色々あります。

「真の武士」小栗忠順

東善寺 住職　村上泰賢

歴史の継続性

小栗忠順（ただまさ）はほとんど国民に知られていない。

幕府解散で勘定奉行及び海軍・陸軍奉行の兼職を解かれ、江戸から知行地上州権田村に移り帰農隠棲を進めていた小栗を、養子又一・従者とともに捕らえ、無実の罪を着せて殺害したのが西軍である。明治五、六年に学校制度を始めた明治新政府は幕府政治を低く評価する歴史観を基調とし、日本の近代化に尽した小栗忠順の業績も表に出さず「日本の近代化は明治政府が手がけ成功」と教育喧伝してきた。

本書はその明治以来の風潮がまだ色濃く残る昭和十六年に「海軍の先覚者」としての小栗の業績を確認顕彰しようと発刊されたもの。先学の関連書籍をよく渉猟吟味し縦横に加減調和した力作で、当時としては小栗忠順に関する画期的かつ勇気ある出版であったといえよう。

どこの国の歴史にも継続性があるはずで、日本の近代化も明治以後いきなり突然変異のように成ったものではない。江戸幕府の二六〇年間戦争をしない世界史でもまれな政治によって蓄えられ積み上げられた民力が、日本人の気質と識字率八〇％と言われる教育・文化を築き、それを基盤に幕末にすでに日本近代化の努力が重ねられていた。そうした江戸時代を引き継いで、明治の近代化は花開いている。

なかでも幕末の小栗忠順の業績には目覚ましいものがあり、遣米使節（一八六〇）から帰国後八年間に実施・構想したものは、

横須賀製鉄所（造船所）建設の推進・洋式陸軍制度（歩兵騎兵砲兵）の採用訓練・フランス語学校「仏語伝習所」設立（横浜）・鉄鉱山 中小坂鉄山（群馬県下仁田町）の開発・日本最初の株式会社を設立「兵庫商社」「船会社（小布施）」「築地ホテル（江戸）」など・ガス灯設置・郵便　電信制度の開設・新聞発行を提唱・鉄道建設の提唱・金札発行など金融経済の立て直し・郡県制度の提唱・森林保護の提唱

とまさに日本改造とも言うべき多岐にわたる内容で、「明治の近代化は小栗上野介の敷いたレールの上になされた」とまで言われている。

遣米使節の見聞

その業績を検証すると、万延元年（一八六〇）、遣米使節としてのアメリカや世界一周における見聞が大きな影響を与えていることは、本書に「幕末政治家として群をぬき、更生新日本再建のため、軍事、外交、経済、あらゆる角度に変革を策し、国家のため短き生涯を国に捧げた基礎は、正しくこの遣米使節として海外を闊歩しその見聞に依って得た知識の発露にあった」と記す通りである。日本に導入することに大賛成だと云われている」（1860/6/22付）と、小栗忠順の先見性が際立っていることを報じている。

横須賀は産業革命の地

米国の工業力に圧倒され、日本は何から手をつけたらいいかと模索していた小栗は、この見学で本格的な総合工場としての造船所が日本の近代化を進めるに最適な施設であると確信、帰国四年後にその提案が通り、慶応元年（一八六五）に着工したのが横須賀製鉄所（造船所）である。以後、この横須賀製鉄所は日本の近代工業の原動力として日本中に種子を飛ばし続けた。日本の産業革命はワシントン海軍造船所見学を契機として建設された横須賀造船所で始まったと見ていい。

ところがこの遣米使節の歴史もまた、学校教育では隠されてきた。隠した証拠が随行船咸臨丸（かんりんまる）の話。日本人は大正七年から昭和二〇年敗戦まで、国定の修身教科書（歴史教科書ではない）で、虚実取り混ぜの脚色された咸臨丸「神話」を刷り込まれ、いまだにその後遺症から脱していない。

私は現在の歴史教科書から咸臨丸の絵を外し、代わりに横須賀造船所建設の原点となったワシントン海軍造船所見学の記念写真（本書掲載）、を掲載して歴史の継続性を教えるべき、と考えている。

幕府の運命、日本の運命

小栗忠順の造船所建設提案には、時期尚早などさまざまな反対論が渦巻いた。旧幕臣島田三郎は往時を回想し、

小栗は「幕府の運命に限りがあるとも、日本の運命には限りがない。自分は幕府の臣であるから幕府のために尽す身分ではあるけれども、それは結局日本のためであって、幕府のしたことが長く日本の為となって、徳川の残した仕事が成功したのだ、とのちに言われれば徳川家の名誉ではないか。国の利益ではないか。同じ売据えにしても土蔵付き売据えのほうがよい。あとは野となれ山となれと言って退散するのはよろしくない」と語った（島田三郎『同方会報告』第壱号）。

と、いずれ新しい家主が入るこの売家（政権）を土蔵（横須賀造船所）付きにして渡してやればいいという江戸っ子の洒落と、彼のすぐれた国家観を伝えている。

真の武士

幕末に大砲の砲身をくり抜こうとしたがいかんせん水力が原動力では一昼夜で三〇㌢しか開けられなかった。横須賀製鉄所では最初から蒸気機関を原動力としていた。横須賀製鉄所を歴史の中で位置づけるなら、蒸気機関を原動力とする日本初の本格的な総合工場、まさに日本の産業革命発祥の地と言える。「日本近代工学のいっさいの

それゆえ、小栗忠順の業績を確認するにはアメリカでの見聞体験を正確丁寧になぞる必要がある。

米艦ポウハタン号で渡ったアメリカでの最大の収穫は、ワシントン海軍造船所の見学であった。まず案内されたのは、鉄の塊を熔解して鉄製品を造る大きな工場。蒸気機関の釜、シャフト、パイプ、大砲やライフル銃の部品も造り、組み立てるネジ、船室のドアノブまで、あらゆる鉄製品を造船所で造っている。蒸気機関の動力を巧みに利用し、数人で簡単に鉄を切断する様子に驚く。

当時の黒船は木造船だから造船所に木工所もあり、たくさんの木材を板に挽いて、船体、船室、階段、床を造り、蒸気機関と帆走を併用していたから製帆所も、ロープを造る製綱所もある。さらに案内されるとたくさんの部品を集めて「船も」造っていた。まさに造船所はすべての製品が一つの工場内で補い合って生産され、「船も」造る総合工場と言えるものであった。

ニューヨークタイムズ紙は使節一行を

「彼らは財布をはたいて、あらゆる種類の反物、金物、火器（銃）、宝石類、ガラス器、光学機器そのほかわれわれの創意と工夫を示す無数のものを買う。我が国と日本との通商の道が十分に開放されれば、これらの物品はそっくりまねされ改良されて、わが国に戻ってくるに違いない」

と報じ、続けて

「小栗豊後守（忠順）はアメリカの進んだ文明の利器を源泉」（司馬遼太郎『三浦半島記』）とは、このことを指す。完成後は外国船の船舶修理も請け負い「毎（つね）に英米の商船、露仏の鉄艦、大となく小となく修理工作を依頼して踵（きびす）を接す。」（『横須賀繁盛記』明治二一年）状況で、修理費の収入も莫大であった。横須賀が海軍専用「軍港の街」となる明治後期以前の、総合工場としてのオープンな横須賀造船所を見直すことが、小栗忠順の「土蔵付き売家」を理解するに欠かせない。

明治四五年夏、東郷平八郎が小栗の遺族に「日本海海戦においてロシア艦隊を完全に破ることができたのは、小栗さんが横須賀造船所を造っておいてくれたおかげ…」と礼を述べ揮毫を贈った（本書）のも、うなずける。

伝えられる小栗の言葉に、「国が滅びても、この身が倒れるまで公事に尽くすのが　真の武士である」（福地源一郎『幕末政治家』）というのもある。

まさに日本の運命は「真の武士」たらんとした小栗忠順の構想した近代化に支えられていたといえよう。

■このたびの復刻に際しては、B6判の原本をA5判に拡大しました。
■このパンフが着く頃には完成しております。売切の節は、お許し願います。

■体　裁　A5判上製箱入　五百頁
■定　価　一万二千円（税込・送料別）
■予約特価　一万円（税・送料共）
▼書店不卸　▼締切厳守　▼返本OK

限定三百部復刻（番号入）

〒745-0032
周南市銀座2～13
☎〇八三四㈫二一九五
マツノ書店
URL http://www.matuno.com
E-mail info@matuno.com

小栗上野介正傳　目次

①海軍の父 小栗上野介の全貌
小栗上野介小伝
小栗上野介の新らしき史的考察
海軍の父小栗上野介
武将小栗忠政の血を受けた上野介
槍術無双の又一忠政
五輪の指物
戦場秘話
忠政の墓壊滅を免る
普門院と忠政
徳富蘇峰先生の上野介観
勅を奉じ断乎軍港創設
青年宰相阿部閣老の失敗
開国の恩人井伊と小栗
小栗上野介の任免譜
勅諭を拝し万民感泣す
井伊大老と上野介の異る点
新文化を吸収した小栗
ポーハタン号の使節の船室
遣米使節としての上野介
咸臨丸と福澤諭吉
木村摂津守全財産を失ふ
使節一行の珍談
一行華府着の光景
ウイラード・ホテル
使節一行と白亜館
大統領と公式謁見
小栗上野介は全権か監察か
大統領の大饗宴
全権一行と米陸軍の観兵式
お札博士の観た小栗
米海軍中尉ジョンストン氏の小栗観
ジョンストン中尉とはどんな人か
海軍の建設を企画―遣米より得たる副産物
かうして海軍力は展びた
横須賀海軍工廠開設の起原
職を賭して造船廠建設に当たる
製鉄所約定と轟々たる反対論
小栗の妙案海軍軍律を正す
仏国との交渉顛末文書（メルメデカション口訳筆記）
幕末海軍の概勢
日本最初の海軍兵学校（長崎海軍伝習所）
造船所の先駆長崎製鉄所（現三菱造船所）
惜まるる長崎海軍伝習所の廃止
仏英を教師としての海軍伝習
②小栗上野介の生涯を語る
小栗上野介の修養時代
禅を学ぶ青年　小栗の腹と才
朝敵か大功臣か
小栗上野介の銅像建設
皇后陛下の有難き御言葉を伝ふ
海軍省より錨、水雷を下附さる
小栗上野介の最期
江戸引上げの理由
大砲と銃を持つて去る
赤城山に軍用金を埋めたは嘘か
事実か　上野介の恭順
小栗追捕状と出先官憲の越権
上野介父子斬首さる
小栗殺害の隠蔽策
罪状申渡しの届書　良心の呵責
小栗の墓を建立
小栗上野介を斬つた原保太郎翁と語る
生きていた　原翁と対座　かうして斬つた　小栗の駿馬に蹴らる
首の落つるとき　原翁晩年の心境
保太郎翁の死
小栗上野介の首級とその墓
小栗家の主張と普門院
小栗家と小栗上野介の墓の決定
山内に伝はる首級
何処に身を寄せたか
権田は上野介夫人の嫌つた所
③文学に現はれた小栗上野介の片影
村松梢風氏著「ふらんすお政」
島崎藤村氏著「夜明け前」
近松秋江氏著「小栗上野介」
吉川英治氏著「檜山兄弟」
中里介山氏著「大菩薩峠」
中里介山先生と私
蜷川博士にお答へいたします
小栗上野介の開国思想
小栗上野介とその開国思想
借歎・開国・売国奴
小栗の計画した六百萬弗借款
幕末金埋蔵風聞記
果して小栗上野介は金を埋めたか
小栗をまつり上げるまでの道筋
私も、つい乗った　頭山先生一行の墓参　又はじめた
小栗上野介の下僚としての勝海舟と福澤諭吉
小栗と勝　小栗と福沢　榎本武揚を助命した福沢 西郷が敬服
した福沢 勝と福沢 武士道と勝
④研究余滴
烏川の恩讐
烏川の風光　室田で戦闘ばなし
罪なくして斬らる　東善寺老僧と語る　閻魔大王の歩哨
小栗上野介と海軍の巨星
水交社の饗宴
小栗上野介と大猷和尚
上野介と女学生　小栗と海軍の父
我が国最初の建艦「清輝」の進水
上野介と大猷和尚　大猷和尚の公案　上野介と大猷和尚の訣別
雄渾な直筆　金五拾両　悲惨なる大猷和尚の最期
軍馬の改革と小栗上野介
小栗の献金政策
明治大帝ウエルニーに勅語を賜ふ
―海軍に賜ふた勅語の嚆矢
小栗とウエルニー　ウェルニーに勅語を賜ふ　地下で感泣
三井財閥と小栗上野介
三井を築き上げた三野村利左衛門
小栗上野介と三野村利左衛門
三野村小栗の遺族を救ふ
新聞事業の先覚者小栗上野介
岡田首相と床次逓相の展墓
我が海軍の恩人小栗上野介を語る
小栗まつり雑記
十年一昔　まつりの前後　小栗祭
小栗上野介の国家功績に関する高位大官の辞
招魂碑建設、回忌等に関するもの
■解説　村上泰賢